

DEAR
MR. AKIRA TAMURA



P H O T O b y H I D E O M O R I



Rock Palace

2002.12.8

田村明の横浜時代
わが生涯の輝ける一年

文 小林伸男
写真 森日出夫
横浜・野毛 武蔵屋 一九八八年



田村明

は、ひさしぶりに関内駅に立った。改札を出ると正面にこげ茶色のタイル壁の市庁舎が建っている。

「ここに十三年いたのか」

溜息ともつかないつぶやきが胸のうちで起った。が、視線は市庁舎の前に輝くような新緑の枝を広げた楠の木立の方に行っていた。楠の木の植込みのかげに、石造りのベンチで憩う人の姿がちらほらと見えた。へくすのき広場と呼ばれているが、ここも放っておけばおぎなりの緑を配した単なる駐車場になっていただろう。

田村はいま、法政大学教授として政治社会学を教えている。ほかに東大工学部、早大理工学部、東京芸大美術学部、横浜市大商学部などの講師を兼ねている。その合い間合い間にエジプト、アラブ方面へ都市計画のため外遊したりしている。都市づくりの第一線から退いたわけではない。が、つい七、八年ほど前まで横浜技監として横浜の都市づくりに熱中していた頃のことを想うと、手持ち無沙汰な感じがするのは否定できなかつた。

田村は駅をはさんでへくすのき広場の反対側にある〈大通り公園〉に歩いた。ロダンの彫刻〈考える人〉とひさしぶりに対面し思わず笑みをもらした。大通り公園には〈考える人〉のほかにヘンリー・ムーアの〈三つの部分からなるオブジェ〉という前衛彫刻があるが、これらはすべて役所の予算によらず田村独自の方法で調達してきたものだ。

〈考える人〉のすぐ背後の白いステージにのぼると、石の広場の向こうに水の広場があつて、水とたわむれる子供たちの姿が見えた。そのむこうに陽光に映える山桃やけやき、楠などの木々の緑が延々と続く、田村は思わず目を細めた。

難産だったなあ。

田村は二十四年前のことを思い出していた。昭和三十八年のことだった。

田村

は、夫と二人で山下公園の真ん前に建つマンションに住んでいた。東京生まれの東京育ち、東京っ子ではあつたが、住まうなら東横線

沿線の横浜のどこか、と決めていた。東京から見ても「少し端っこすぎたかな」という気がしないではなかつたが、横浜に視点を置きかえればと真ん中の一等地だ。

窓を開ければすぐ汐風が吹いて、港の鼓動がじかに伝わってくる。大晦日ともな

れば、午前零時の刻(とき)を合図に、闇の中に灯火をちらつかせた無数の貨物船が、「ぶう、ぶお、ぶおおー」

それぞれの音色で延々と古い年を惜しみ、新しい年の訪れを祝つて二斉に汽笛を鳴らした。裏手の中華街からは、ばんばんパチパチ、爆竹の音が耳をつんざくように響いてくる。そうした情景に接していると、港町のイメージが次第にふくらんできて横浜がこよなく好きになるのだった。

街と人のかかわり合ひは、このように一体感を抱けるひとときを持たなければ本当とは言えない。

田村はそう思う。

人が住める都市というものは、道路や上下水道といった基盤整備のほかに、こうして住む人の心や感性にも訴えかける「美しさ」や「快適さ」「楽しさ」を盛りこむことが必要だ。そうした(へもの)の価値が認められ、受けいれられなければ、人々は都市の中でただ働き、ただ生活するだけになってしまつて、決して自分たちの街に愛着を持つことはないだろう。

そうなつてしまつたら、

「都市に生まれ、都市に死ぬ」

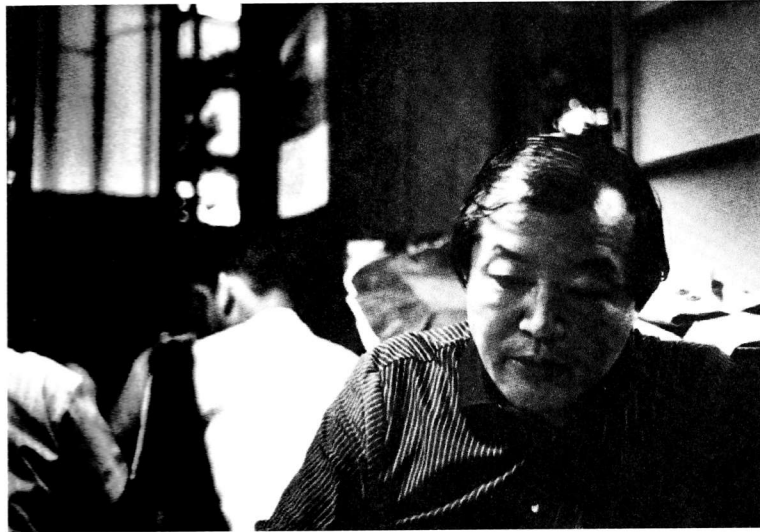
そういった生き方を運命づけられたいわば都市化人間は救われまい。

そんなことを思っていた矢先だった。横浜市の革新市長として国政から市政に転じてきた飛鳥田一雄から浅田孝を通じて「都市計画プランを立案してくれないか」という話を持ちこまれてきた。

田村は、えんえんと遠いまわり道を経たあとで、都市プランナーとして生きることを決め、大学の先輩である浅田孝のところを身にかけていた。浅田孝は都市計画分野の先駆者で〈環境〉という言葉や考え方を日本へ最初に導入してきた人間だ。「俺は大学教授なんてそんなくだらんことはやりたくない。民間のプロとしてやることに意義があるんだ。大学の連中なんてみんなアマチュアだ」

そんなことを平気で言う。

田村の目から見ても一種不思議な人物で、大学時代には浅田からいつも本当か嘘かわからないような面白い話ばかり聞かせられていたのを思い出した。とにかく



非常に幅の広い人、それが浅田孝という人物に対する田村の印象だった。

田村自身も東大の建築と法科を出て、自民党の首脳を姻戚関係に持つ運輸省のキャリア組の一人でありながら、

「最初から先の見えた人生なんてクソ面白くない」

そう言つて約束された官僚のポストを袖にした男である。その後、日本生命に就職し、不動産関係の仕事を九年間やったあと、そこも退社した。

「俺は街づくりの仕事をやる」

結婚したばかりの妻にそう宣言した。

あのまま

運輸省にいれば、日本生命にいれば、という発想が世間一般の物の考え方だったが、

「二つの世界に閉じこもりたくない」

というのが田村のモットーだ。

「俺は街づくりをやる」

そう宣言したものの、食べてゆけなければ街づくりもクソもない。が当面、確たる当てもないので師匠に当たる丹下健三を訪ねた。そこで再会したのが浅田孝だった。

「いろいろ生き方があるかもしれないけれども、私も小さな事務所を持つてるから、よかつたら来なさいよ」

以前から、田村は浅田に対して好感を抱いていた。浅田からみても、一つの殻に閉じこもらない田村の生き方には好感が持てた。この浅田との再会が、田村にとって横浜との出会いになった。

浅田孝が〈小さな事務所〉と卑下した事務所は「都市開発センター」といった。人数からいえば小さいが、やっていることは大きかった。田村がそこで最初に手がけたのが、香川、愛媛の都市計画、次いで大阪の沿海工業地帯環境整備計画、さらには鹿島灘、名古屋、三重県、そして本四架橋問題、万博と実績を積み重ねた。これらの仕事の延長線上に横浜市の仕事があった。

浅田は事務所を田村にまかせればなしにして顔を出さない。来たとしても馬鹿っぱなしを少ししたかと思うとすぐ姿を消してしまう。不思議な人だとあらため

て思う。が、田村にしてみれば思うぞんぶん力が発揮できるというものだ。毎日、二、三時間しか寝る時間がないというほど仕事に没頭した。

田村は、とりあえず研究室タイプの域を出ない「総合計画」を飛鳥田に提出した。この「総合計画」を受けるかたちで立案したのが高速道路、地下鉄、ベイブリッジ、都心部強化、金沢地先埋立て、港北ニュータウンなどの六大事業を骨子とする具体的な都市計画案だった。この計画は昭和四十年一月、飛鳥田市長(当時)が市民に提案するかたちで公表された。が、役所の局長クラスの幹部は不平たらたらであった。

「あいつが来るたびに余計な仕事が増えて困る」

「でもしないことをあいつは言ってくる。とんでもない奴だ」

聞こえよがしの声が聞こえてきた。

昭和四十三年四月、横浜市は機構改革を行い、六大事業を総合的な見地から推進してゆく企画調整局を新設した。その結果、その「とんでもない奴」が

「どうだい。企画調整局でやらないか」

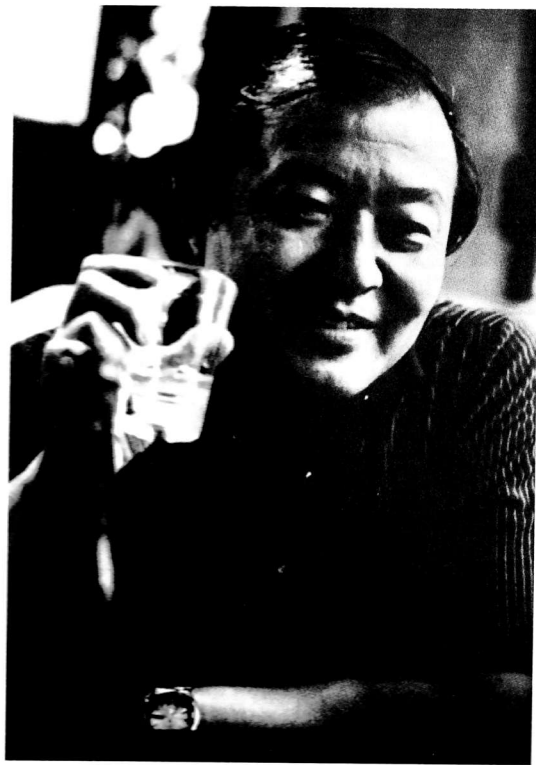
飛鳥田に声をかけられて役所の中へ乗りこむことになった。

役所には「三不主義」という不文律がある。遅れず、急がず、働かずという、つまり事なかれ主義。現状維持をベターとする体のいいサボタージュだ。一心に働く姿など役所の中ではみられない。そんな者がいれば、すぐ村八分に近い目に合わされる。それを覚悟のうえで田村は役人の世界へ入っていった。

田村

の考えによれば、プランナーとかプロデューサーとかいわれる仕事にやるのがプランナーの仕事だというのが田村自身の信念だが、世間には仕掛けだけやる者、つなぎだけ、収めるだけする者もいる。田村が立案した六大事業は仕掛けにあたるわけで、役所に乗りこんできた田村にとっては、それをどうつなぎ、いかにして収めるかが課題だった。

三十五歳までは課題を決めずに生きよう。田村は、自分にそう言いきかせてきた。あまり早いうちから人生の目標を決めてしまうと、とかく最短距離を選びがちになるものだ。一方向的な選択や経験の積み重ねはとかく視野を狭め、思いあ



がりの強い人間をうみやすい。自分の立場、相手の立場、すなわち全体的な立場に立つて判断し、物を考える能力が十分には育たない。柔軟さが失われる。田村がおそれたのはそれだった。

旧制中学三年のとき、胸を患って二年間を棒に振り、人に遅れをとったこと。多情多感な年代に戦争、敗戦。そして価値観の百八十度転換を体験したこと。そのような経験が一本の道筋に身をまかせきってしまうことの危険さを教えたのかもしれない。

「東大の法学部を出たということは、役人としちゃ最高のキャリアなんだよ。しかも、上級試験の成績もよい。と、そこまではいい。けどあんた、前があるのがいけないよ」

前といっても前科のことではない。法学部のほかに建築科を出ているのがいかにいうのだ。運輸省時代、先輩に言われたことばである。法科のほかに建築科を出ているから面白い。そう思うのが普通だが、役所の常識は逆だった。

「場違いなところで勉強してるよりも、その間浪人でもしていて空白になっている方がまだましだ。要するに前がなけりやいいんだ」

そういう判断しかうまれない。常に〈総合的〉に物を考えようとする田村には、忘れるようにも忘れられない言葉だ。

役所というところは、もともと〈総合性〉を嫌う体質がある。みんなが総合的に物を考え、自由にはばたきはじめたら、法律や慣行や上下関係だけで成り立つ役所は崩壊してしまう。少々グズでも、従順で、安定したタイプの人間が好みだ。それはとりもなおさず〈権力的体質〉の人間の好みだった。田村はそういう〈権力的体質〉を嫌い、かつては役所を去った。

では、またなぜ？

都市プランナーとして生きようと決めたのが三十六歳。自ら決めた成人式には一年遅れたが、いまは迷わずこの一本の道で生きようと決めている。都市プランナーというからには仕掛けだけで終わらず、つなぎも収めもやりたい。六大事業は自分が仕掛けた仕事だ。自分でつないで自分で収めなければ魂がこもらない。ある種の障害は承知の上で、田村は役人になった。

六大事業

を現実に進めようとする田村が、いきなり直面したのがすでに都市計画として決定をみている関内駅前のインタチェンジ化であった。胸の中に山下公園、日本大通り、横浜公園、そしてまだ構想の域を出ない大通り公園と横浜の都心を緑でつなぐ〈緑の軸線〉構想というラブレターをあたたためて役所へ入ってきた田村にとって、実に許しがたい計画であった。

が、すでに計画を国が認可している。役所で、しかも上級官庁で二度決まったことを下級官庁の意志で覆すなどということは〈絶無〉である。まして一官吏の力でどうなるものではない。田村はかつて一年半ほど運輸省で役人のメシを食ったことがあるのだから、そんなことがわからぬ人間ではない。しかし、計画通り関内駅前に大インタチェンジができたしたら、横浜の都心の〈美しさ〉や〈快適さ〉〈楽しさ〉はどうなってしまうか。こちらの想いが田村の心の中では勝っていた。それはもう憤りに近かった。

それは都市を殺す計画である。そういう計画を黙認することは、田村が自分で自分に対し「都市プランナーになる資格がない」というのと同じことだった。いわば踏み絵であった。

田村は都市計画決定の変更を関係方面に働きかけた。飛鳥田はこの田村の上に十八年先輩の鈴木和夫を持ってきた。直截に物を言う田村に対して、鈴木は逆に「マ、マ、マ」というタイプの温和な英国紳士だった。そして何よりも根っからの役人であった。

「自分がやった中で二番の名人事」

のちに飛鳥田は、二人の組合わせを指してそう言った。矛盾から生まれる調和の微妙な美しさともいおうか。

田村は高速道路を半地下式にして目立たないようにし、地下鉄はさらにその下を通せと主張する。道路局と交通局はすでに決定した都市計画であることをタテに取って譲らない。田村と道路局、交通局の間で、激しいやりとりが繰り返された。その間に立つて、どちらに付くでもなく絶妙のクッション役を果たしたのが鈴木である。「マ、マ、マ。きょうのところはそれくらいにして、お互いにもう一度検討しあつてからまたということに」



決裂にいたらなかったのはまさに鈴木功績だ。

道路局は建設省、交通局は運輸省、それぞれ本省と呼んで出先みたいになっている。したがって、道路局や交通局の幹部は経過報告をしにいちいち本省へ行く。

「こんど横浜に田村ついでのが来て、なんか変なことを言ってるか」

「決まったことに口出しするとはけしからん。田村が何者か知らんが押し戻せ。貴様らそれでも男かー」

行ったりきたりの代理戦争が始まった。

苦しいのは本省と田村の間に立たされた道路局、交通局の幹部連中である。田村が来て宿題がふえたところの騒ぎではない。百年続いた役所の太平楽に突如ライオンが飛び込んできたようなものである。

「いや、田村さんの言うことはわかった。でも、ここまで決まっていることなんだから無理言わんでくれ」

道理ではなく慣行が抵抗線になった。

横浜

の街づくりという大局観から道路を考えるのではない。本省と出先の力関係の中で失点も得点もなく、ソツなく「自分の担当する仕事」を終わらせたい。そういうアタマしかない体の言い泣き落としもいえた。

そういう幹部たちを説得して八分通り味方にしたのは、田村の意を汲んで動いた鈴木であった。ただし、この英国紳士、田村の意をきちんと伝えはするが、それ以上のことは決してしない。百人の役人が百人とも「これぞ役人の手本」と言いそうなやり方である。

「あいつはもう建設省には寄越すな」

相手から出入りを差しとめられている田村にしてみれば、まさに隔靴搔痒だった。

「田村さん、大通り公園なんてどうでもいいじゃありませんか。妥協なさいよ。彼らと二杯飲んで仲よくなさい。そうすれば田村さん、すぐく強力になるから」

田村シンプの部下にまで、見るに見かねて忠告を受けるほど。一瞬、そうかしら？という思いが頭の中をよぎった。相手もつらい、自分もつらい。が、ここで妥協したらおしまいだ。自分には〈街づくり〉の夢がある。立場がよくなるのか、自分の地位が強力になるとか、そういう権力構造の中に割って入る考えはない。自分は

大勢の人のためによいと思うことをやっているのだ。ここが天王山だ。田村は踏みとどまった。こうした頑張り、前例のない極めて反役人的なビヘイビアだった。

役人というものはしたたかな未来予測をもって権力者の下につき、忠誠を誓って引き上げてもらう。一〇〇パーセントたて型の社会で横のつながりは〈皆無〉だ。そういうビヘイビアが何代かにわたって引継がれてきた。そうした暗黙の秩序の前では、いまさら田村でもないのだ。そういう強大な秩序に公然とたてついているのだから、彼らにしてみれば正気の沙汰ではなかった。

「田村はじきにアゴを出す」

が、田村はアゴを出さなかった。

一年後、当初の計画は撤回され、地下鉄の上を通る高速道路は中村川の上を通ることになった。掘割川を埋めて走る地下鉄の地上の敷地は、大通り公園として生かされることになった。第二步で蹴つまずかなかったこと。これで田村の旗色がはっきりした。

「田村さんのやったことは古今未曾有だ」

役人をよく知り、なおかつ役人ではない浅田孝は高く評価した。もちろん、市長の飛鳥田の後押しがあつたし、鈴木のような協力者がいたからこそできたことだ。しかし、ここ役所の中では不可能とされることを可能と発想し、不可能を可能に逆転させた精神の若々しさと柔軟さ、粘り強さが逆に問題だ。誰もが考えないことを発想できるということは、決定的な差なのである。創造性の根源がそこにある。きらめきさえすればあとはみなだいたい同じやり方をたどってゆく。結論を自分に有利な方向に導けばよいのだ。

が、役所一般の立場から見ても、田村のやり方はどううつたのだろう。この世界の中では〈役所〉〈役人〉以外のキャラクターを持つことを忌む傾向がある。めざましい働きや功績も禁物だ。なめらかな池の水面に波紋を投げかけてはいけない。飛鳥田一雄や田村明といった闖入者よりも、ずっと以前から役所の中におり、今後もずっと居続けるのは自分たちなのだ。言ってみれば彼らは通行人、役所の主は自分たちなのだ。旧弊を次々に打破されてゆくことは苦痛だった。苦々しいことであつた。結局、役所の中では拍手も喝采もおこらなかつた。



そして、飛鳥田の去るときが来た。

飛鳥田

が社会党の委員長として国政に返り咲いたあと、保守系の細郷道二が新たな市長として市庁舎の玄関をくぐった。それを機会になめらかな水面下で流れが激しく変わりはじめた。田村はそれを肌で感じた。

飛鳥田は去っても自分には横浜の街づくりが残されている。自分が忠実になるのは仕事に対してだけだ。田村は誰はばからず仕事を続けた。役人の常識からすれば居残ったのである。仕事よりも人に従属する役人の世界では、田村のように技監という助役級の高い地位にいる者はいさぎよく身を引くべきだという見方しか成立たない。世界観、人生観のちがいである。

田村が飛鳥田に従属したことはない。飛鳥田の転出は、よき協力者を失ったというだけにすぎない。六大事業はまだ未完成なのだ。飛鳥田が細郷に代わったって、田村にとっては関係ないのだ。みずからははじめた仕事をやりとげること、問題はそれだけだった。

しかしながら、田村は企画調整局長を解任され、ただの技監として窓際に追いやられてしまった。権限はあるが手足をもがれたのだ。次いで技監規則が一部手直しされて、人事権を剥奪された。日向ぼっこをどうぞというのである。

田村に従つとも上がり目はないぞ！

言葉で言うわけではない。言葉でいうよりもこの方がもつと効果的なのだ。そのくらいなのが忖度（そんたく）できない鈍な人間は役所にはいない。事実上、田村は仕事を取りあげられたに等しい。抗議したところで、「それは考えすぎですよ。田村さんの健康を心配したにすぎません」とかわされるのがオチだ。顔を合わせれば「やあ、田村さん」と細郷は笑顔を向けてくる。みずからがコンニャク問答を仕掛けるほど田村は愚かではない。

田村は細郷に辞表を提出した。

細郷はニッコリ笑って田村の辞表を受取った。

もつと早く気づいてくれれば企画調整局長を解任したり、技監規則を変えたり、面倒なことをしないで済んだのですよ。

にこやかな笑いにはそんなニュアンスもこめられていた。細郷にしてみれば田村に何のうらみがあるわけではない。田村という人間が嫌いなわけではない。ただ「飛鳥田の腹心」とみられている田村をそのままにしておくということは、細郷自身の統括能力を問われることになりかねないのだ。

辞表を受けた翌日、細郷は田村に電話をかけてよこした。

「技監は誰にしたらいでしょうかね」

この電話の意味を翻訳すると、私が辞めさせたんじゃありません。あなたが自分でお辞めになったんですよ、とそういうことになる。カフカの「城」ではないが、城の正体を知ろうと城のまわりをぐるぐるするとまわりながら遂に何もつかめなかつた〈K〉の心境に田村はなつた。

田村

は役所を去った。が、仕事は残った。金沢地先の埋め立て、馬車道庫の保存などなど、田村の尽力に負うところの仕事は数知れない。港北ニュータウンやベイブリッジのように大幅に計画が遅れたものもあるが、なかでも一番忘れることができないのが昭和四十二年から四十二年にかけての一年間である。

関内駅前大インタチェンジができていて、その姿と現在の関内駅周辺の姿と見比べることができれば、誰の目にもあの計画がいかに無謀で馬鹿げた計画かわかつたはずだ。しかし、人間の苦心や努力といったものは形となって表れてこないから、他人にはわからない。

「横浜で最も横浜らしいところは、こぢんまりとした狭い地域に集中しているんです。そのど真ん中に巨大な道路構造物をつくったらどうなりますか。あなたがたは横浜を殺す気ですか。こんなものを関内駅の真ん前に作ったら間違ひなく横浜は死にますよ。つくってしまったからこれはひどいって言ったって遅いんです！」

大通り公園に立つたたび、田村は熱くなつて無謀な計画と闘ったあの一年を思い出す。あの一年ほど自分のすべてを出しきった二年はないという気がしている。それは都市プランナーとしてこれからも生きようとしている田村にとって「わが生涯の輝ける一年」なのであった。

「図書館と黒板のどちらが必要か」ある大学教授の最終講義だった。

二つとも情報関係の大事な必要用具だが、基本的な違いがある。図書館には膨大な情報量が蓄積されており、黒板自体にはなんの情報も無い。情報量からは図書館だというのは分かりきっている。ただし、図書館には莫大な資金と日常運営費が必要だが、黒板なら砂でも土の上でも代用できる。しかしここでは費用のことよりも、この二つは基本的に機能に注目したい。今なら図書館に代えてパソコンのインターネットを使うと、正確性や信頼性を多少犠牲にすれば、居ながらにしてあらゆる情報が検索できる。地球の裏側の地図だって見られる。

人類社会が今日まで発展してきたのは、現在までに蓄積された情報を知識として保存蓄積し、次世代へ伝達できたことによる。言語、文字、さらに印刷術の発明によって、過去の知恵や知識を受けついで行くことができるようになった。その情報集積の代表が、かつての啓蒙時代は百科事典だったし、その後は図書館になり現代の知的世界を拓いた。さらに現在は即時性、迅速性をもつインターネット全盛の時代になっている。それに比べると、黒板自体はここに何かを書き入れない限り、何も教えてくれるわけではない。この二つを比較することは、あまりにも違いすぎて意味がないように見える。だが、情報に対する機能としては対照的で、考えてみるとおもしろい。

知識を得ることは重要だし楽しいが、知識を詰め込んだだけでは独りよがりだ。もっと重要なのは、新たな情報を生み出す能力だ。基礎教育は主として知識を得ることだが、その後の教育は、知的創造ができる能力を身に着けることだ。

膨大な情報量自体は既に存在しているのだから、知識を得ただけでは価値を生まない。知らないことも知ってしまったらそれまでだ。人間にとって価値あるものにするのは、情報を生かして使い、さらに活性化させることだ。今日の社会は過去の情報蓄積の上に、情報創造を加えて進んできた。新たな情報は人間の脳のなかから生まれる。脳がさまざまな刺激を受けて行われるのだが、その中でも重要なのは、人間同士の発想や知恵の交流の場が大事だ。黒板はただの情報伝達として使うこともできるが、もっと大事なのは、交流の場の道具として無から有を生み出すために使われることだ。

私はよく内輪の会議では、大きな作業机にトレーシングペーパーを広げ、カラーのマジックを使い何でも書き込んだ。会議の参加者も口だけでなく、ペーパーの上に表現する、つまりここは黒板だし、頭の中身を出来るだけ字や図で表現するための道具なのだ。黒板は消さないと次が書けないが、ロール紙なら次から次と書いてゆけばよい。

口頭の議論を黒板に表現してみると、他人にも自分にも新たな刺激を与え、新しい発想が生まれてくる。知的創造には膨大な図書館だけでなく、互いに刺激を交錯させ、無から有を生み出す黒板機能を随所に潜ませておくことが大事だ。その黒板機能を使いこなすには、頭脳を膠着化させないで柔軟で積極的なものにしておくことが求められる。



1929年 田村明君 3歳

WEST

AFRICA

1998.3.11 ~ 3.27



BAMAKO 巴马科

SENEGAL

BENIN

NIGERIA

COTE D'IVOIRE

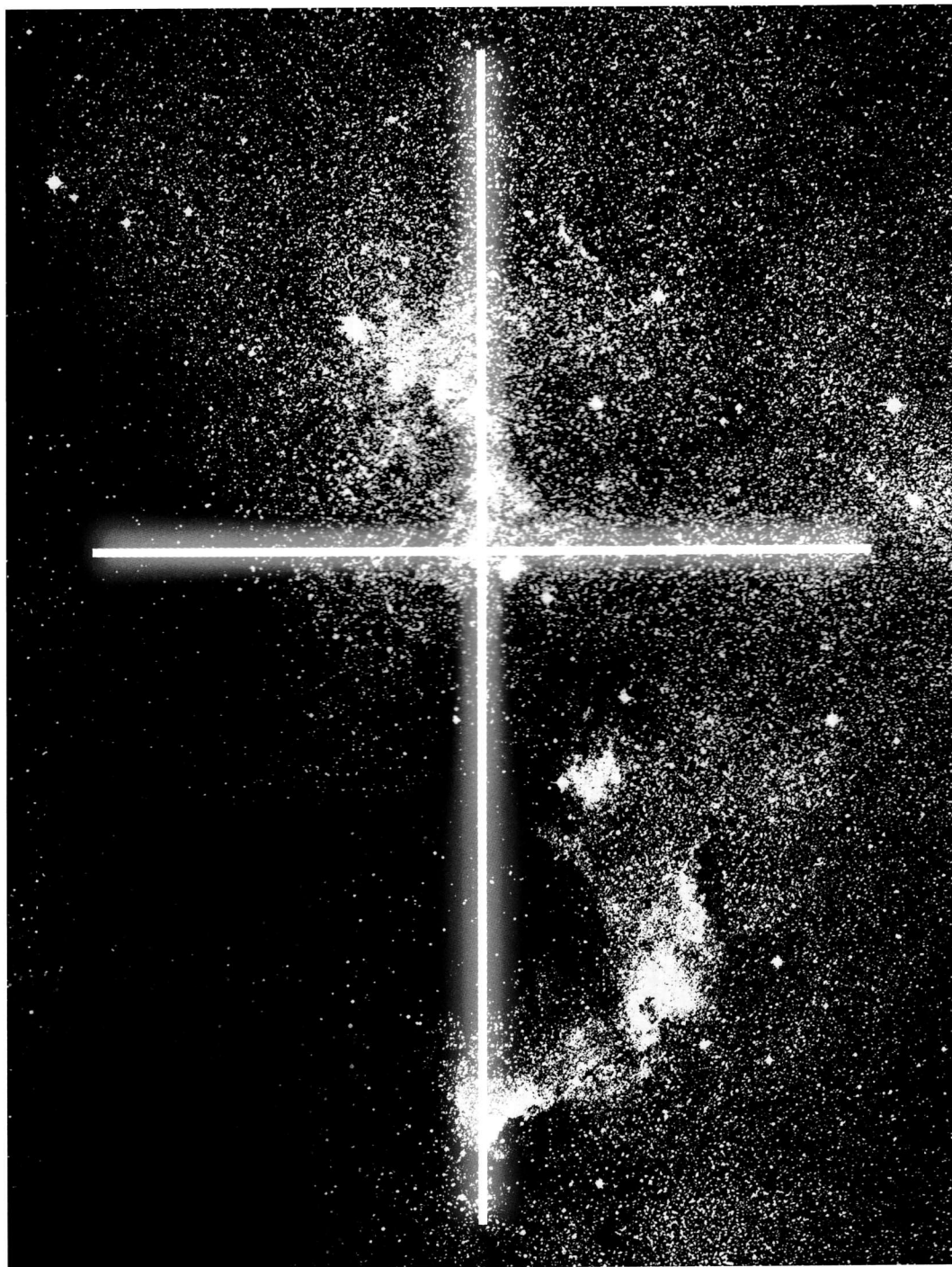
MALI

田村 明(たむら・あきら)1926年7月25日東京で生まれる。東京大学工学部建築学科、同法学部法律学科、同学部政治コース卒業。運輸省、日本生命、環境開発センターで仕事をし、1968年横浜市に入庁。横浜市企画調整局長、技監を歴任し、1981年退職。同年法政大学法学部教授となる。

1997年に法政大学を退官し、法政大学名誉教授、都市政策プランナーとして全国のまちづくりを支援。「まちづくり」という言葉と考え方を日本中に広めた。

2010年1月25日に静岡県東伊豆町で天国に旅立つ。

著書に『都市を計画する』『都市の個性とはなにか』『自治体学入門』(以上、岩波書店)、『まちづくりの発想』『まちづくりの実践』『まちづくりと景観』(以上、岩波新書)、『都市ヨコハマをつくる』(中公新書)、『環境計画論』(鹿島出版会)、『現代都市読本』『イギリスは豊かなり』(以上、東洋経済新報社)、『江戸東京まちづくり物語』『都市ヨコハマ物語』(以上、時事通信社)、『美しい都市景観をつくるアーバンデザイン』(朝日新聞社)、『「市民の政府」論』(生活社)、『都市プランナー田村明の闘い』(学芸出版社)など多数。



D E A R MR. AKIRA TAMURA

田村明の肖像

撮影場所.....横浜・みなとみらい21地区「ドックヤードガーデン」

撮影日時.....2008年4月21日(月)14時32分

撮影者.....森 日出夫

構成者.....町口 宙

「田村明さんを偲び、お別れする会」実行委員会

「田村明さんを偲び、お別れする会」 2010年4月3日(土)14:00~17:00 ヨコハマ創造都市センター